

## 文化環境を活かしたまちづくりと河川流域管理との関連性についての研究 —三重県伊勢河崎を事例として—

### The Relationship between Community Design Utilizing the Cultural Environment and River Basin Management: A Case Study of Ise Kawasaki in Mie Prefecture

山本佳世子\*  
Kayoko YAMAMOTO\*

**Abstract** This study focuses on the town of Ise Kawasaki in an attempt to understand the interrelationship between unique features of the management the Seta River basin and a community design working to harness the cultural environment provided by its history as a port town and wholesale district on the Seta River. The results show that these two apparently heterogeneous activities are both deeply involved with the common regional resources of the Seta River, and that maintaining harmony between the two is important. Moreover, such efforts have the potential to produce tourist attractions not through community design emphasizing history and culture, but also through the river basin management centering on river repair and water quality clean-up.

**Keywords:** 文化環境, 河川流域管理, まちづくり, 伊勢河崎  
Cultural Environment, River Basin Management, Community Design, Ise Kawasaki

#### 1. 研究の視点と目的

近年, 人々の景観への関心が高まり, 個性ある美しい街並みや景観の形成が求められるようになってきた。このような社会的風潮を受けて, 2003年には「美しい国づくり政策大綱」が発表され, 2004年に景観法が施行された。そして地域の歴史や伝統を活かしたまちづくりが全国各地で活発に行われており, かつての街並みの復元・整備が進められている。またこのような活動は, 地域の新たな観光資源の創出・確保にもつながっている。

一方水環境分野においては, 「環境—自然」, 「参加—社会」を謳う1997年の河川法改正を契機として, 「河川区域の限定を行わず, 分水嶺を含めた流域全体を視野に入れて捉える」という「流域主義」の考え方が表出するようになった(六宮ら, 2003)。そのため河川の上流域, 中流域, 下流域が連携し, お互いの実情や問題点を理解しあうことにより, 河川の流域管理を推進する地域が多くみられるようになった。このような地域の事例のうちでは, たとえば琵琶湖・淀川水系や琵琶湖流域では, 河川と湖沼の一体となった流域管理を行っており, 市民・住民をはじめ行政, 企業, NPO, 研究機関等によるネットワークが形成されている(山本ら, 2003; 山本, 2004)。

そして近年では, 以上で述べたような文化環境を活かしたまちづくりとその地域の形成に深く関わっている河川の流域管理という, 全く異なる性格を持つ地域づくり活動が同時に行われる地域もみられるようになった(山本, 2006)。そこで本研究は以上で述べた視点から三重県の伊勢河崎を取り上げ, 問屋街と勢田川の港町という歴史や文化などの文化環境を活かしたまちづくりと勢田川の流域管理の特性を把握し, これらの活動の相互の関連性について明らかにすることを目的とする。

#### 2. 研究の枠組みと方法

本研究は, 文献5) 6)を中心とした文献調査, インター

ネットを利用した調査, 現地調査およびヒアリング調査(2005年8月~11月)の結果をもとに行う。第3章において研究対象地域の概要について整理したうえで, 第4章では伊勢河崎の文化環境を活かしたまちづくりの特性, 第5章では勢田川の流域管理の特性を把握し, これらの相互の関連性を明らかにする。これらの成果を踏まえ, 最後に第6章では本研究の結論と今後の研究課題について示す。

#### 3. 研究対象地域の概要

図1に示したように伊勢河崎は三重県中央部の伊勢市に属しており, 近鉄伊勢市駅の北東部の徒歩5分程度の距離に位置する地区である。この地区は, 北条の遺臣河崎宗次が長享年間(1487-1489; 室町時代中期)に勢田川のほとりの葦原を埋め立て, 四方に惣門を設けてまちを造ったことが始まりであるといわれている。江戸時代には, 全国各地からの伊勢神宮の参宮客でにぎわう宇治山田に, 一級河川の宮川水系の勢田川の水運を利用して大量物資を供給する大問屋街として発展した。そのため江戸時代から昭和初期頃まで「伊勢の台所」と呼ばれ, 伊勢の商業の中心を担っていた。

勢田川流域にはこの川と関係の深い町々が河崎以外にもいくつか連なっており, 江戸時代から昭和初期にかけて港町として栄えた歴史を持つ。これらの各港は機能がそれぞれ異なり, 河崎以外では, 大湊は造船, 神社は船参宮の拠点, 二軒茶屋は内宮参拝者の港であった。戦後になると水上輸送から陸上輸送中心になったため, 問屋街としての河崎は衰退していった。さらに1974年7月の台風による七夕水害で勢田川の改修を行ったために, この地区の貴重な歴史的な建物が減少してしまっ

た。しかし詳しく後述するように, 勢田川沿いの石積みの蔵, 伊勢独特の様式の商家や町屋, その周囲を取り巻く世古道など, 問屋街として栄えた時代の街並みは今でも残っている。また同様に後述するように, 河崎の衰退とともに勢田川は忘

\* 正会員 名古屋産業大学 (Nagoya Sangyo University)

られ、付近の住宅地から生活排水が流れ込むようになるにつれて水質が著しく悪化した。

#### 4. 文化環境を活かしたまちづくりの特性

##### 4-1. まちづくり活動のプロセス

伊勢河崎の港町、問屋街としての地域固有の歴史や文化を活かしたまちづくりが開始されたのは、前述の1974年の七夕水害を契機としている。表1はこれまでの伊勢河崎のまちづくりのプロセスを整理したものであり、以下ではこの表をもとにまちづくり活動の特性について紹介する。表1に示されているように、1979年に勢田川の改修計画に対する住民の異議申し立てからまちなみ再発見と保存運動が始まり、住民による河川改修の提案とまちなみ調査が行われた。しかしこれ以降、勢田川の河川改修事業については、住民と旧建設省とが協議し、改修方法などで住民案を提示しながら話し合う期間が長く続いた。

同じく1979年には、「伊勢河崎の歴史と文化を育てる会」が結成された。その後の活動は停滞傾向にあり、1996年には街並み保存活動の危機を迎えたため、河崎の特徴である土蔵の保全再生を図り、「商い」をキーワードにまちづくりを進めるようになった。この試みでは、河崎倶楽部などの若年層を含めて、新たなまちづくり団体で活動を行うことで街並み保存活動の輪を広げようとした。

このような地元に着した活動の成果が実り、1997年には伊勢市都市マスタープランにおいて住民参加により地域別の構想が策定され、河崎地区は「地域の歴史文化伝統を大切に伊勢の新しい交流拠点」の一つなり、「市民主体のまちづくり」の活動拠点として活用するため整備する地区として位置付けられた<sup>注2)</sup>。このような行政の対応から、地域住民だけではなく伊勢市などの行政も、河崎地区の歴史や文化を評価し始めたことがわかる。さらに1999年にはNPO法人伊勢河崎

まちづくり衆が成立し、2002年には河崎のまちづくりを活性化する拠点としてこの団体の運営による伊勢河崎商人館（写真1）が開館した。同年にはNPO法人伊勢河崎まちづくり衆が各種団体（22団体）に呼びかけ、河崎まちづくり協議会を設立した。

さらに河崎地区では、勢田川を活かしたまちづくりとの連携も始まった。同じく2002年には、前章で示した勢田川流域の3地区（大湊、神社、二軒茶屋）のNPOに呼びかけ、勢田川を活かしたまちづくりを連携して行うために整備検討会議を組織し、「海の駅・川の駅」整備全体構想を策定した。2003年には伊勢市が河崎地区の空土蔵を買収し、「河崎川の駅」を開設した。

表1 伊勢河崎のまちづくりのプロセス

年次	河崎のまちづくりの経過
1979年	勢田川の改修計画に対する住民の異議申し立てから始まったまちなみ再発見と保存運動 住民による河川改修の提案とまちなみ調査（観光資源保護財団） 「伊勢河崎の歴史と文化を育てる会」の結成
1982年	河崎まちなみ館の開館
1985年	まちなみ案内板の設置
1996年	伊勢・河崎蔵バンクの会発足
1997年	伊勢市マスタープランにおける住民参加による地域別構想の策定（河崎を勢田川歴史文化交流軸の中心、歴史文化交流拠点として位置付けた）
1999年	旧小川商家（伊勢河崎商人館）の買い上げ NPO法人伊勢河崎まちづくり衆の設立
2002年	伊勢河崎商人館の開館とNPO法人伊勢河崎まちづくり衆による運営開始 河崎まちづくり協議会を設立 「海の駅・川の駅」整備構想を策定し、川を活かしたまちづくりを検討
2003年	伊勢市が空土蔵を買収して「河崎川の駅」として改修整備し、開設

注) NPO法人伊勢河崎まちづくり衆のホームページを参照して、ヒアリング調査により作成



図1 伊勢河崎の位置



写真1 伊勢河崎商人館（2004年8月撮影）

#### 4-2. 歴史的街並み保存活動の成果

前節で紹介したような地元で深く根付いたまちづくり活動により、河崎地区では狭い通りの両側に伊勢独特の切妻、妻入りの商家や蔵が立ち並んだ歴史的な街並みが保存・再生されている。この地区の商家や蔵のいくつかは内部が改造され、写真2に示すような喫茶店、美容院や居酒屋などとして利用されている。

また伊勢市内では、街中に点在する個人のコレクション、地場産業の工房、モデルショップ、建物などを「伊勢まちかど博物館」として公開している。このような試みは、伊勢のまちおこしグループ「ザ伊勢講」が中心となり、「誰でもちよっとした場所さえあれば、自分の好きなものを誇れるもの、楽しみをもとに博物館の一つくらいは作れる」を基本テーマに始まった。河崎地区の9ヶ所だけでなく、内宮地区に7ヶ所、参宮街道地区に8ヶ所、二見浦地区に3ヶ所の合計27ヶ所のまちかど博物館がある。前節で紹介した伊勢河崎商人館も河崎のまちづくりを活性化する拠点として、まちかど博物館に登録されている。

このように伊勢市では、まちづくりに市民が熱心に取り組んでおり、前節でも述べたように伊勢市都市マスタープランは多くの市民の参加のもとで策定された。そして伊勢市独特のまちづくり活動の成果は、市民と行政、専門家とのパートナーシップによって3年間をかけて作成された「まちづくりブック伊勢」（まちづくりガイドブック制作委員会、2000）として出版された。

### 5. 勢田川の流域管理の特性

#### 5-1. 宮川流域ルネッサンス事業

図2に示すように勢田川は宮川水系の下流域に位置しているため、宮川水系全域の流域管理活動についてまずは紹介する。三重県内には、一級河川が7水系（木曾川、鈴鹿川、雲出川、櫛田川、宮川、熊野川、淀川）、二級河川が74水系と合わせて81水系がある。これらの一級河川のうちでも、宮川は日本有数の多雨地帯である大台山系を源流とし、延長約90km、流域面積920km<sup>2</sup>（12市町村を含む）の三重県最大の河



写真2 伊勢河崎の街並み (2004年8月撮影)

川である。写真3は宮川が伊勢湾に注ぐ河口付近の様子を示したものであるが、下流域では農地と住宅地の分布が多いことがわかる。また宮川は、一級河川を対象とした国土交通省の水質調査で数回全国1位になるなど、全国有数の清流として知られている。

三重県では、1997年度から、河川を中心に山から海に至る水系を一体的に捉え、宮川流域をモデルに宮川流域ルネッサンス事業に取り組んできた。表2はこれまでの宮川流域ルネッサンス事業の経緯を整理したものであり、以下ではこの表をもとに事業について紹介する。表2に示されているように1998年には宮川流域ルネッサンスビジョンが策定され、これまでに2度実施されてきた。2000

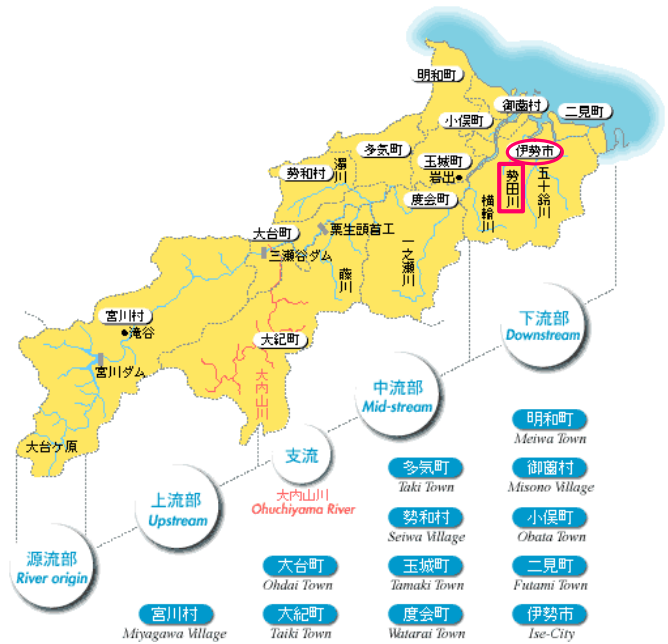


図2 宮川水系における勢田川の位置

注) 宮川流域ルネッサンス協議会のホームページ<sup>注3)</sup>に掲載された図に加筆して作成



写真3 宮川の河口付近と伊勢湾  
 (鳥羽市朝熊山展望台より2004年10月撮影)



年には宮川流域ルネッサンス協議会が設立され、2002年には円卓会議が開始された。さらに2003年には、エコミュージアム全国大会が開催されたことを契機として、宮川流域を生きた博物館として捉えるエコミュージアムも推進されるようになった。

### 5-2. 勢田川の流域管理

次に勢田川に焦点を絞って、流域管理の特性について把握する。勢田川は1級河川としての全長は7.3kmと小規模な河川であり、伊勢神宮に献上する魚を採っていたため、古くは御贄川(おんべがわ)と呼ばれていた。この河川は鼓ヶ岳を源流としており、途中で豊川・清川・桧尻川を合わせて、下流においては五十鈴川と共に伊勢湾に流れ込んでいる。第3章で述べたように勢田川流域には、河崎をはじめとするいくつかの港町が栄えてきた。しかし昭和30年以後はトラック輸送の増大に伴って、船の利用が激減し、勢田川も使われなくなってしまった。

勢田川の水運の利用が減少するとともに、流域内の宅地化が進行し、各家庭からの生活雑排水の流入量が増加したため、水質や悪臭等が問題になってきた。そこで1990年から国土交通省三重県河川国道事務所では、伊勢市との協働事業として勢田川浄化第一次事業を開始した。この事業により、勢田川流域で下水道が整備されるまで、宮川の水を浄化用水として勢田川に導水するようになった。

さらに同事務所では、清流ルネッサンスⅡの事業として2001年度から5カ年計画で川底を浚渫する「水環境整備事業」や、地域の住民との「勢田川の浄化を考える懇談会」の開催・運営を行ってきた<sup>注5)</sup>。この懇談会の中で、勢田川の「水質浄化」と「落差工計画」について住民意見を積極的に取り入れるようになり、「市民自らで考え、行動して勢田川をきれいにしていこう！」を合い言葉に、地域住民を中心とした「勢田川きれいにプロジェクト(SKiP)スキップ」が2003年8月に開始された。この活動は主に行政と住民によるワークショップ形式で行われているが、住民による勢田川本流および支流の水質の一斉調査や、住民意見を取り入れた水質改善活動が行われている。2004年には、上流の砂地と植生が下流へ流出するのを防止する目的で、住民意見に基づいて「とおりゃん瀬」を設計・整備した。

表2 宮川流域ルネッサンス事業の経緯

1997年	「宮川と共に生きる会」設立 宮川流域ルネッサンス事業開始
1998年	宮川流域ルネッサンスビジョン策定
1999年	宮川流域ルネッサンスビジョン基本計画、第1次実施計画策定
2000年	宮川流域ルネッサンス協議会設立
2002年	宮川流域ルネッサンス円卓会議開始
2003年	宮川流域ルネッサンスビジョン第2次実施計画開始 宮川流域エコミュージアム全国大会開催
2004年	宮川流域エコミュージアム推進計画策定

注) 宮川流域ルネッサンス協議会のホームページ<sup>注4)</sup>をもとに作成

また1974年の七夕水害を契機とした護岸工事によって川と人々の生活が隔てられていたが、流域の住民が中心になって取り組んでいるまちづくりの一環として川の活用が提案され、前章で述べたように「河崎川の駅」の設置や木造船の建造など新たな取り組みが行われるようになった。写真4は勢田川沿いに現存している土蔵群、写真5は勢田川の護岸の様子を示したものである。これらの写真からも、河崎の歴史や文化を活かしたまちづくりと調和を保った形で、勢田川の川づくりが進められていることがわかる。

### 6. 結論と今後の研究課題

本研究は伊勢河崎を取り上げ、問屋街と勢田川の港町という歴史や文化などの文化環境を活かしたまちづくりと勢田川の流域管理の特性を把握し、これらの活動の相互の関連性を明らかにすることを目的とした。特に、第4章では歴史や文化を活かしたまちづくりの特性、第5章では勢田川の流域管理の特性を把握し、これらの相互の関連性について示した。

その結果から、伊勢河崎では、これら2つの一見したところ異質な活動は勢田川という共通した地域資源に深く関わっており、それぞれ調和を保ちながら推進されていることがわ



写真4 勢田川沿いの土蔵群 (2004年8月)



写真5 勢田川の護岸 (2004年8月)

かる。特に歴史的街並みの保存・再生活動は勢田川の河川改修を契機としていた点と、まちづくりの一環として川づくりが位置付けられている点には、勢田川と伊勢河崎のまちとの関連性の強さが明確に示されているといえる。

これらのことにより、伊勢河崎の歴史や文化を活かしたまちづくりだけではなく、勢田川の河川改修や水質浄化を中心とした流域管理が新たな観光資源を生み出す可能性もあるといえる。また第4章および第5章で紹介した活動は、地元住民が中心となって行われており、住民提案型の勢田川の河川改修などが実施されていた点も興味深い。さらに勢田川流域が含まれている宮川水系全域ではエコミュージアムが推進されており、川づくり活動が河川流域全域で行われていることも重要な点である。

今後の研究課題としては、本研究と同様に、地域固有の歴史や伝統などの文化環境と河川や湖沼、海洋などの水環境との関わりについて、様々な地域においてケーススタディを行うことにより、現状と問題点、課題を把握することが挙げられる。

#### 補注

- 1) 特定非営利法人伊勢まちづくり衆 (2006. 1. 21 更新)  
河崎のまちづくり  
<<http://www.e-net.or.jp/user/machisyu/machizukuri.html>>  
2006. 8. 10 参照
- 2) 伊勢市 (2006. 8. 10 更新) 伊勢河崎商人館の概要  
<<http://www.city.ise.mie.jp/icity/browser?ActionCode=content&ContentID=1016072404204&SiteID=000000000000&FP=search&RK=1156235748795>> 2006. 8. 10 参照
- 3) 宮川流域レネッサンス協議会 (2006. 8. 10 更新)  
清流マップ<<http://www.miyarune.jp/map/index.html>>  
2006. 8. 10 参照
- 4) 宮川流域レネッサンス協議会 (2006. 8. 10 更新)  
宮川流域レネッサンス事業のはじまり  
<<http://www.miyarune.jp/kyogikai/hajimari.html>>  
2006. 8. 10 参照
- 5) 国土交通省三重県河川国道事務所 (2006. 8. 10 更新)  
勢田川きれいプロジェクト  
<<http://www.dcr.mlit.go.jp/mie/seta-clean-project/index.html>>  
2006. 8. 10 参照

#### 文献

- 1) 六宮彰宣・土肥真人 (2003) 多摩川水系河川整備計画策定プロセスにみる社会空間形成における河川の可能性。  
ランドスケープ研究, VOL. 66, NO. 5, 745-748
- 2) 山本佳世子・水田有夏志・西川真介 (2003) マザーレイク 21 計画 (琵琶湖総合保全整備計画) における河川流域単位の試み。都市計画報告集, NO. 1, 1-4
- 3) 山本佳世子 (2004) 環境パートナーシップによる琵琶湖の流域管理に関する研究。都市計画報告集, NO. 2-3, 87-90
- 4) 山本佳世子 (2006) 地域固有の文化環境及び水環境を活

かしたまちづくりに関する研究 一木曾地域を事例として  
一。都市計画報告集, NO. 4-3, 57-62

- 5) 海の博物館・石原義剛 (1996) 伊勢湾 海の祭りと港の歴史を歩く。風媒社, 165P
- 6) まちづくりガイドブック制作委員会 (2000) まちづくりブック伊勢。学芸出版社, 95P.